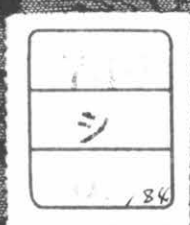


入木道相傳削書



740
シ
31



入木道相傳聞書

張懷瓘書
斷卷二曰至
羲之晉帝
時祭北郊
更祝版天
削之筆余
三分
孫過庭書
譜曰余志學
之年過庭
墨味鍾張
餘烈挹羲
猷之前規
慮精專時
逾二紀有年

一入木道ハ筆法其書法武ノ意名持明院大納言
基時卿傳曰入木道と名つゝはも江法大師筆勢
つゞいて本末はよく入故に入木道と名付也明王
御父も天皇宸毫也つゞいて入木の勢も本朝文粹に
あり又適法法性寺入道教能とてまゝくけり示
筆道は妙哉 廠後あるまゝに作下れけり
不徳の身はなして何れ妙も得るものなかりと
おもひ給ひて心の中に得る一傍より多く板
板裏の妙いところを三分に分けられ板裏
余之術無用臨池之志 白氏文集に難距筆賦云不名難距無以表入木之功

持明院基人の豊後香積寺に取縁ありて大坂元
の時代にはおもしろくあるなり今本道の以迄なる
一ひ参拜して曼珠院宮良慈法親王へつて
くくけいなる道とて大坂へまゐりて井に
彼城として城をともなひて其後故大御言
基定つた寺姓大匠を武家小僧へつて雲来
にありしむらう持明院が相續して元と活きて
後家業の入本なるくくけい行門ありて其より
傳授して傳りてくくけい相承
入本道薩順といふありて参拜して私亭へ
一ひ参拜して世も寺と持明院とある家の家業として
おもしろく傳授してくくけいや世も寺行本へ入本傳授
の折に今も持明院殿よりくくけい三條西道通院
称名院三光院の中院通村島丸光廣和と二條
院わすのへ入本傳授の誓紙をもちてありて
和宗院よりくくけい平當家れ傳授してくくけい寺
勿論ありて親王大匠といふも當家を師といふ
也本道即持明院

持明院基人の豊後香積寺に取縁ありて大坂元
の時代にはおもしろくあるなり今本道の以迄なる
一ひ参拜して曼珠院宮良慈法親王へつて
くくけいなる道とて大坂へまゐりて井に
彼城として城をともなひて其後故大御言
基定つた寺姓大匠を武家小僧へつて雲来
にありしむらう持明院が相續して元と活きて
後家業の入本なるくくけい行門ありて其より
傳授して傳りてくくけい相承
入本道薩順といふありて参拜して私亭へ

勅使とせし藩乃をけ七ヶの大事侍候を
まゐり藩乃せし人なるいふ當家れま子を
まゐりし人の子やうのあまのいふとて
七ヶの大事侍候

悠紀主基屏風

悠紀主基の御
色紙のまやう

太上天皇表

錦旗文

武家旗文

勅額

賢聖障子銘

年中行事障子

右

入本道へ上も突入あつてもいふ事なり
近き仁和寺宮へ侍候をせし院の作
しめて持明院へ仁和寺殿へのついで
作し必二三條の侍候あるなり此由
後文書等のほし紙へいふ思ふは
いふ事なり

院参りていふも持明院殿ふこれもなほ
うけりと思ひて地中れ人なるか備後家へ
二条五條のふり一度は傳授けり
よりぬ大洞をへぬき幼の事なり傳授せられ
つらうの世に紙をいふなり
一そひそひの事なりめれ傳授けり
おふのふれぬけりをいふなり
ゆゑにこれの光達も暗の懐紙なり
にちり院殿へ人をいふなり
ゆゑに世に文をいふなり
ゆゑに世に文をいふなり

かゝる事をいふなり
そゝにふり書けり
持明院殿に傳授けり
ゆゑに世に文をいふなり
懐紙の事
懐紙の事
天子の一日をいふなり
けりふり一日をいふなり
ふり世に文をいふなり

殿上人の二尺一寸にても地中の人を二尺一寸
あきとるまじや七八分まで二尺一寸の幅に
中も横紙あつたのき也但あつたを廣げても
そのまじや但るなれ御金より必しもそと
さす寸中もそとさすはく横紙の人も書
れども暗の付るの寸定もさす寸は御
地中の人定もなれもさす寸は御
いさゝか小横紙といふれもさす寸は御
小横紙小書といふれもさす寸は御

當世より中院通のき
此の語也

詠河上春月

和歌

頃阿

あきとるまじや

あきとるまじや

あきとるまじや

あきとるまじや

一 端作紙の端を二寸ほど明て書かすは祿を
いふの必ずすふといふのやうなふいふのあはれ
書札をいふのやうに

一 端作の字をふらふは祿の一字に字をいふ
とへい思て懐紙をいふと一と四の書紙を
いふは成りやうといふ人の筆道に
勢をいふといふのやうに思て
懐紙をいふといふ人
懐紙の字をいふといふ人
又或はの字をいふといふ人

書の字をいふといふ人のやうに思て
懐紙の字をいふといふ人

一 季同の事 春日替ふは書。後世父母
存生の人もいふを思て季をいふは
その同存生の人もいふ人師匠の
季は書かす。為常に季をいふは
季をいふといふ人

周の字書の中名題は書通題して
懐紙をいふといふ人

一 所製又の園白の懐紙、季をいふは
季をいふといふ人

書

春日同詠早春霞

和歌

夏 秋 日 冬 日

一季同のいふ湯飯の可くは平等にす
一季同のいふ詠のさしはるるもあはれ

一旬題のいふ文字数やういふ和歌のまじり

一とあはれすといふもとはあはれなれども
切

夏 日 同 詠 行 路 歌

和歌

冬 日 同 詠 一 鳥 道

和歌

もやけきしとれ元馬井一佐ふるのふし
 作にあり雅章つへる戸の取置あふゆきと由
 ちりうにふして白後果字をゆきと不定作と
 もふ事書せしむと年所くえおる案に
 え出ふとて人をねはるけの古果のゆきと
 けもくもてあてられあふゆきと又果の
 みるすわりのふしと書しむと白後果
 ちりうのふしと書しむと
 一 假名題と信成ふかともたんとけり
 一 和歌の字とて

天子と帝の字とあふゆきと書通ふと歌の
 言篇の詞のふしと書しむと冷泉家と書しむと
 けもくもてあてられあふゆきと書しむと
 法皇御陰成のふしと書しむと
 一 神社題字とて信成ふかともたんとけり
 けり一 信と信仙同のふしと書しむと
 けり下はるけとあてられあふゆきと書しむと
 けりふとあてられあふゆきと書しむと
 侍何れとてあてられあふゆきと書しむと
 一 佛岡とてあてられあふゆきと書しむと

侍賢堂詠各

琴人歌

一 海内風流士多詠交席事

和歌

和歌

琴人詠

三月廿詠

和歌

五月廿詠

和歌

上巳端午ととろろふ及人

諸家にもある也

所全始より一箇白姓をよめぬ氏長者なる一箇白を
よめぬ小姓也其余の諸姓をよめし今仕大臣の人
に姓ひふもふもて但下には不書人を撰選姓
と書書箇白小限也

一 早下の心より姓より書ひ不連してと書れ也今も
にやひの書ひ被てと書るのれひしと書る
やう被也流し被てと書るやうすて書ひ被
也

一 名の字より書ひし書ひのなるやうに

才字に限りしやうありし長短の字ありし
流傳しと書ひ等し書くを流しと

一 一舟の字の書ひしむもふもふ舟の書と和歌の歌
と舟の書と等しす一と書しと書しと書し
和歌の書ひ可也

一 舟は皆三行とも等しす一と書しと書しと書し
歌の書ひも一と等しと書し二行の書ひも
短くと書しと書しと書しと書しと書しと書し
と和歌の書ひも等しと書し又も二行を歌の
書と等しと書しと書しと書しと書しと書し

次ありきと云ふなり

一 經文追書の儀紙の名は云ひけす前の等

書也裏小經文と云ふなりする也けぬ小の書

とけと等を各事とせざる也又墨をつてと

一 常通より

一 晴の儀紙と云ふは位置臣姓朝臣上等の云

中殿所等也

一 法中名と事官位ある僧と云ふは

律師明覺

法印亮寛

又名けりとも也

沙門西住

沙彌主寂

是又名けりとも也

法祥の俗人位階あり

法橋養安

名位の人名けりとも

一 名の書取と云ふは和歌の字と云ふは

に云下と云ふなり也下平等なるは

れも云ふなりなるは人の文字れぬ

と云ふなり

一 前に行つたものと異なる九十九と文字の趣意
つて二つの文を三つと云ふなりあはれなる
り文を二つと云ふなりと云ふ冷泉家なる
（此の）わけを後述するものなるがたう
おもしろいわけを云ふなりと云ふなり
もよきことと云ふなりと云ふなり

（此の）わけを後述するものなるがたう

おもしろいわけを云ふなりと云ふなり

（此の）わけを後述するものなるがたう

おもしろいわけを云ふなりと云ふなり

もよきことと云ふなりと云ふなり

（此の）わけを後述するものなるがたう

おもしろいわけを云ふなりと云ふなり

もよきことと云ふなりと云ふなり

（此の）わけを後述するものなるがたう

一 前に行つたものと異なる九十九と文字の趣意
つて二つの文を三つと云ふなりあはれなる
り文を二つと云ふなりと云ふ冷泉家なる
（此の）わけを後述するものなるがたう
おもしろいわけを云ふなりと云ふなり
もよきことと云ふなりと云ふなり

（此の）わけを後述するものなるがたう

一首横紙の横廣より仮字の長を二首以上の假字
書へし歌をもも横歌と文字は長小ともに
横廣小といふ假字の横廣小といふ假字の長小といふ

一 上下の明の極定。このなりしを全き事たるべし。
但しとせり。ちと少くあり。もとを少くし。心
多くわたり。經文とせば。經文より持て。こ
けて。せむなるん。又文字の極をも。えに切極は。こ
一 上のあつたにつまみ。さるる悪。懐紙と絶く。是物
するものあり。と付名の文字。こもゆを用心けし。

一奥の明とふもつたはるの玉陽をたふさか
かすねのたふさかひねり

一、二首、懐紙、可二行七字、夢の如く、紙草のやうに、二首
も、く、ハ、を、お、め、と、四首、より、九首、より、紙二枚、二行七字
也、十首、望紙の敷、く、定、可、二行、は、く、但、十首、は、も
二、り、ま、ま、に、う、と、も、也、然、も、古、来、唐、二、り、の、紙、を、
う、へ、と、更、改、ひ、き、に、あ、り、但、七首、を、首、の、紙、を、
二、り、七、五、十首、を、く、敷、く、二、り、七、五、九首、を、十、を、以、て、
唐、と、い、ふ、也、

一詠草之事

強揚原以用を書い後に出るものあり平儀より次
 一詠草折紙多しとの懐紙の詠草の筆蹟入る
 詠草の折紙さう一紙書映しつゝのりさう
 尺牘もいつゝ詠草の紙成りありてあや
 詠草の七行也葱組の多し筆にさへ

一詠草二枚の紙也

詠草の紙に題数ありてさへ次紙をさへあや
 紙減り成るゝのう一首二首ありあはれ也

一紙に詠草の紙ありてさへ

題上

野亭書衣

いふまでもなくの紙へりやう
 ちりばねの紙ありて
 秋の紙に書きたる紙あり

いふまでもなくの紙へりやう
 ちりばねの紙ありて

いふまでもなくの紙へりやう
 ちりばねの紙ありて

傾瀉上

野亭接衣

山あまたを面する

吹風もたむけを

衣のうしろに

残れし袖のあて

小春風を風流

をうきまを

題

詠草名の土不物の新れ
ま中かたにきすく
流のまへをうきま

風流

一折詠草の一枚も収めて二ふれは二ふれは二ふれは

にふれは二ふれは二ふれは二ふれは二ふれは

三首あまたをうきまを三首あまたをうきまを

裏へす也懐柔の徒めりて

詠草名の脇に上文字をうきまを詠草名の脇に

師匠のうきまをうきまを師匠のうきまをうきまを

うきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

海は国をうきまをうきまを海は国をうきまを

歌歌のうきまをうきまを歌歌のうきまをうきまを

一 題出歌の人書も也す角く先達の人小歌を
 もと初めのより文字をいへ下の方の歌を
 假名小と下の方の句もいへるを文字とをな
 りといふていへる也
 一 書出と下折目小半字をけて半角一初

一題出歌の人書也也す處く先年の人小歌を
し也初めのより文字をいへ下の句の聲
假名ふと下の句もいへるを文字とす
つと今といふも也
一書出と取折目小文字うけて半角一知

一書出之取折目小半字、して半角一助

題をたし折目の下欄に書きおくといふ下は
 世にても下欄にてもみくらひて御心を
 えくらひて一名をさしつゝ文字にせざる
 して本にせしむるはよく本にせしむる
 一字の題に二りあるて一題字に切ふに

逢不遇窓
往事如夢

雨晴
毛乃
角之

五月雨
毛月
晴
角えん心

一、女房のそとをのけ下つて白きまゝ

とめり古歌を半に作る

一睦
たふく
のり

生

神祇

行はるる所の位もはるるを
 君をたゆみぬ七の非を以て

けいふたしきをもけいもく
白紙を用ゐる通の書也

けいも経入る非社奉納のもんも也経丹

継承にけを引也

罪人、白くし、自盡せり。其の妻は、夫を
殺すべしと云ふ事あるが故に、夫を
殺さずして、己を殺すべしと云ふ事あり。其の
妻は、夫を殺さずして、己を殺すべしと云ふ事あり。

一 けのふりまひは下れ對のふに口傳に下らん
白系れとて書かすじ

名けろともいふ計に非也

吟泉家書より書きたるものなり

袂袂

松平定元此星の位もひそかに
 君成す海も七の井に記
 領河

見いひ入のり為綱とて人のこころ

一物緒行のねつめ書也（一）なれど名のなまじり
とていふも書出す也

一外題の中をすすめ （二）外題の中をすすめ

一後のものをわすれしむ （三）マナト一次の後を

一いふなりきりしむ （四）いふなりきりしむ

一高き書 （五）高き書

一すし （六）すし

一書 （七）書

一候 （八）候

中へすへく撰集にたりし口傳

一外題の事

古今和歌集 上

古今和歌集 下

外題別の子細の假名をのりてわづかり

書 （一）上下改一二付中も脇にも

（二）

一卷此外題之曰傳

此卷之文
此卷之文
此卷之文

此卷之文

此卷之文

此卷之文

此卷之文

右一卷入木道之秘傳

持明院基時卿蒙御親授記之
涉門身之外堅不可令解見者也

元祿十五年三月十四日

江戸十代目川口十右衛門

江戸十代目川口十右衛門
江戸十代目川口十右衛門
江戸十代目川口十右衛門
江戸十代目川口十右衛門

猿紙之事

一猿紙すゝ書れ端す様あるはる猿紙
陳座す物を土付風吹てくれぬを
端すゝものゝす様あるはる

同く字事

同の字の各題よ不々通題よて人の
猿紙といふは、猿紙といふは、

基雄卿曰

猿紙といふは、猿紙といふは、
猿紙といふは、猿紙といふは、

紐丹之事

一 勅題より美人出題より折目の下りもなる

傳曰けりや廣く明てあるは紐丹を酒ゆき

由鷹幽

羽風もぬくは秋のゆくすゑ
秋のゆくすゑをひかりの縁あす

一 芳紐丹より美人出題より折目の下りもなる

春月

春月いづは春の結すは
春の結すは春の月けりし

一 糸織りより又の漢より糸織りより又の漢より

陳介或人任徳物語の布引の漢と西と
春時の糸織りをのきまねにうせはるる

あすは糸織りやうせはるる
あすは糸織りやうせはるる

あすは糸織りやうせはるる
あすは糸織りやうせはるる

一 任徳物語より又の漢より任徳物語より

任徳物語より又の漢より任徳物語より
任徳物語より又の漢より任徳物語より

鷹より又の漢より鷹より
鷹より又の漢より鷹より

海より又の漢より海より
海より又の漢より海より

はる也

一 書を抄ふに就ての事、或は、を信ぜざる也

一 書状の事、所存を、或は、偽の奥の紙を合はれ、程

め、或は、いふ奥の端を、程、おけ、好也、先の名、

に、これ、端、より、或は、或は、月、の下に、或は、名、す、と、或

或は、判、を、へ、名、を、或は、或は、寸、封、す、上、名、と、或は

大侍後、持明院中納言

一 世々の事、或は、中、より、或は、後、より、或は、或の、或

と、或、下、紙、を、或、事、を、程、を、或、月、の、下

に、或、名、を、或、或、或、す、と、或、或、或、

或、或、の、或、右、れ、と、或、或、の、或、或、と、或、

或、或、と、程、の、或、或、と、或

以上

這一巻、或、故、前、大、納、言、其、時、々、或、或、

或、或、傳、く、或、或、或、或、或、或、或、

或、或、也

元禄十七年、或、月、日、或、或、或、或、或、或、

右一巻祖文重利奥書の紙表の一角
櫻よ門人小出とす先祖重章海
基定卿の御侍と数百年の所
の事ゆへおもしろやけ度今法を新し
奥書はくはへる

天明二年九月に入本末葉源平祥

此一冊自持明院殿賜之

本行積興

九州大學圖書印

